

日常品としての陶器（17～19 世紀）

16 世紀から 19 世紀にかけての美濃焼は、茶器などの高級品のイメージが強いが、美濃の窯では庶民のための陶磁器も作られていた。ここでは、この時代に美濃で作られたシンプルな皿や茶碗、湯呑み、おろし皿、オイルランプなどの日用品を紹介する。

17 世紀初頭に佐賀県で磁器の原料となるカオリン粘土が発見された。その後、九州の窯元で磁器が作られるようになり、美濃焼の高級品の需要は減少していった。美濃の陶工たちは、競争力を保つために、高級品から日用品の生産に移行した。各地区は、茶碗や水差しなどの特定の製品に特化するようになった。これにより、大量生産と規模の経済が可能となり、高品質なものを比較的安価に生産して、江戸などの人口の多い地域で販売することができるようになった。

例えば、多治見の高田町では、灰釉の徳利を得意としていた。当時、日本酒は「合」という単位で量り売りされていた。酒飯店は、店名と所在地を記した独自の「徳利」を使い、少量の酒を販売する際に顧客に貸し出していた。そのため、徳利の容量を正確に把握することは、酒飯店にとっても客にとっても重要なこととなった。粘土は焼くと収縮するため、一定の容量の瓶を作るには熟練した技術が必要である。高田町のトックリは常に正確な容量を持っていることが評価された。